

2014 年バランス理論講座コラム

第 9 回 坐骨調整シート「楽座衛門」ヒストリー

人間の骨格形状は、幾つかのタイプに分類され、体型が作られています。特に上体は、骨盤位置の左右位置や左右の骨盤の大きさの違い、前後位置、前後傾斜度合い、股関節の可動域、等により、腰椎から胸椎へとバランス保持の為に、背骨の立ち上がり形状に変化が現れて、上体の姿勢を形成しています。また、立位と座位での上体の姿勢は余り変わらず、同様の左右への傾きや回旋が現れています。立位時の足元から作られた骨盤の状況で、上体の姿勢が作られたのと同様に、座位でも骨盤の前後左右への傾きや高さの変化で、立位と同じ姿勢が表れていた訳です。

足元からインソールを活用する事で、姿勢を鉛直に整えて、少ない力で姿勢保持を行うことにより、身体へのストレスや疲労を軽減する事や運動能力を高める事も可能になりました。

しかし、人間の生活には、「立つ」「座る」「寝る」の三つのパターンが存在します。

重力からの負担や重力を活用した健康管理を考えた時に、「立つ」「座る」は、重力に負けない鉛直な姿勢を築き、少ない力で姿勢をコントロールさせるかが重要です。

また「寝る」場合は、重力の負担が少ないように感じますが、計算上は、立位以上の負担が体全体に掛っています。自律神経の副交感神経が優位な状況に持つていくためにも、身体への余計なストレスを感じさせない状況と様々な筋肉や腱を弛緩させる事が大切です。

重力による負荷を体感じて、無意識に姿勢を変えて緊張をほぐす動き（寝返り）も必要な動作となります。

さて、立位で綺麗な姿勢を作り上げても、座位で同様に整えないと起きている間の継続管理となりません。座位では、立位のように骨盤を揺らすような姿勢保持はできません、だからこそ座位の方が腰痛や坐骨神経痛、肩こりなど身体に掛る負担が多く発生する訳です。

立位以上に骨盤をコントロールすることで、腰椎・胸椎・頸椎にかけて、重力負荷や姿勢保持に無理のない、鉛直に近い姿勢を取らせることで問題が解決すると思えました。その為には、骨盤の前後左右への高さや角度の調整が必要となります。

上体を鉛直な姿勢に導く為に、個々に調整のできる坐骨調整シート「楽座衛門」は、単純な長時間座る為の座布団ではなく、生涯にわたる姿勢づくり、姿勢管理の為のアイテムとして開発した商品です。

坐骨調整シート「楽座衛門」は前後左右の四方向への歪みを調整する二代目「楽座衛門」と更に斜め方向への歪みや回旋など、八方向への調整できる初代「楽座衛門」とがあります。

この「楽座衛門」は、開発当初は「千載一遇」の四文字熟語をもじって、「千座一隅」という名前でデビューする予定でした。千に一つの座り心地という意味合いでした。

しかし、商標の問題やある企画が舞い込んできた事で、その時点で、名前を変更することになりました、その企画とは、アメリカワシントンで、日本の文化を発表する機会があり、その会場にこの座布団を持ち込むという話です。

日本の座布団ですが、「千座一隅」では余りに意味が深く、もう少し馴染める名前を模索しました。結局、楽に座れる座布団であり、日本名という事から「楽座衛門」の名は生まれました。更に、役割をはっきりさせるために、**坐骨調整シート「楽座衛門」**として、世に発表しました。その後、特許を取得、3件の意匠登録、国内外の商標登録などが行われて、現在に至っております。

平成19年に生まれた「楽座衛門」は、販売当初には、販売に手間のかかる商品と言われ苦戦していましたが、今では多くの代理店のご愛顧により、安定的にお客様の手に渡っている商品です。理論重視の商品であり、手間がかかるのは当然の事、お客様の事を案じ、丁寧な説明や理論指導を行うことで、この「楽座衛門」の次世代に向けた啓蒙が始まっています。

姿勢改善の道具として活用している治療家、長距離運送の必需品として愛用されている運転手の方々、美容の為にヒップアップや姿勢矯正に使われているエステサロンなど、オフィスや旅行のアイテムとして、様々な分野で大活躍の「楽座衛門」です。

骨格は、遺伝と生活習慣や環境で変化します。子供の頃から重力による身体の歪みを回避させて、しっかりした姿勢で生活をさせる事が、機械によって甘やかされた時代には、必要不可欠な健康器具であり、生活必需品ではないでしょうか。

子供からお年寄りまで、座っているときにも疲れずに、姿勢改善を行うことのできる**坐骨調整シート「楽座衛門」**は、必ず、代々の姿勢や生活を守る座布団となってくれます。